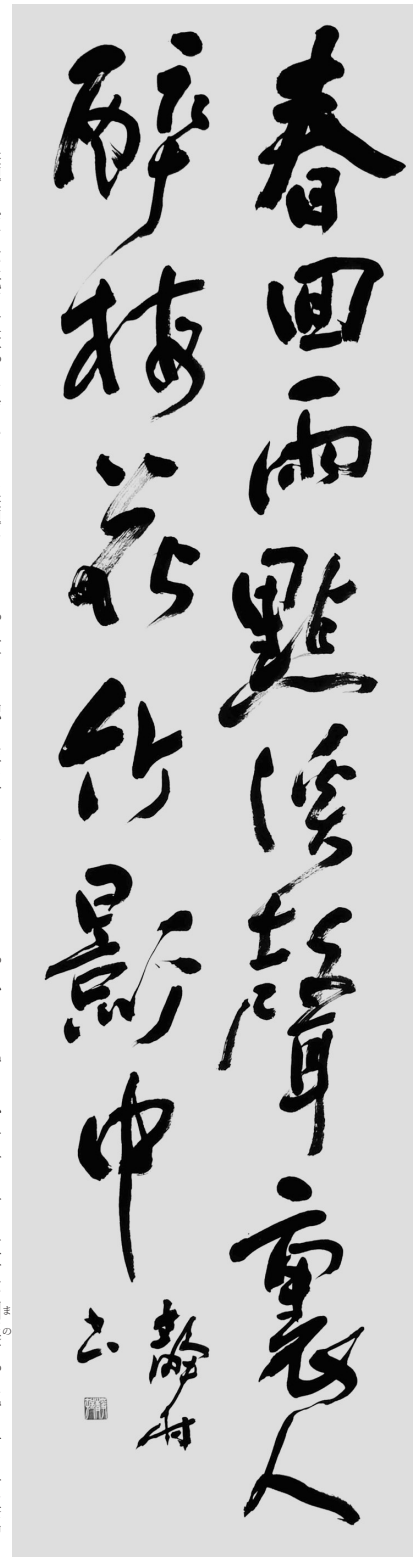
昇試第一部漢字課題　（三月二十二日締切）

A

鈴木静村書



春回雨點溪聲裏　人醉梅花竹影中（楊誠斎）
春は回る雨点渓声の裏、人は酔う梅花竹影の中。

課題の殆どが既習文字。むずかしい課題ではない。大いに独自性を打ち出してほしい。掛けて見るに、右行に対し左行が間延び。他に一ケ所連綿させてはいかが。**影**　三旁（彡）リズム感なし。みなさん、開拓してほしい。**中**　鈍重の失敗字。一般に末字は緊めるのがセオリ。

B

高橋香樹先生書

連綿・意連を意識した作としました。文字は左上から始まり右下で終わるのが基本となっている為、連綿しようとすると前字の右下から次字の左上への長い連綿が多くなります。この長い連綿をいかに少なくするかが課題。今回作は四字連綿一ケ所、二字連綿五ケ所による構成。「**裏**」は「**裡**」を選択。

訳…春はしとしとと降る雨のそそぐ谷川の音の中からめぐって来、人は梅が咲き竹のあるところで酒を酌みかわす。

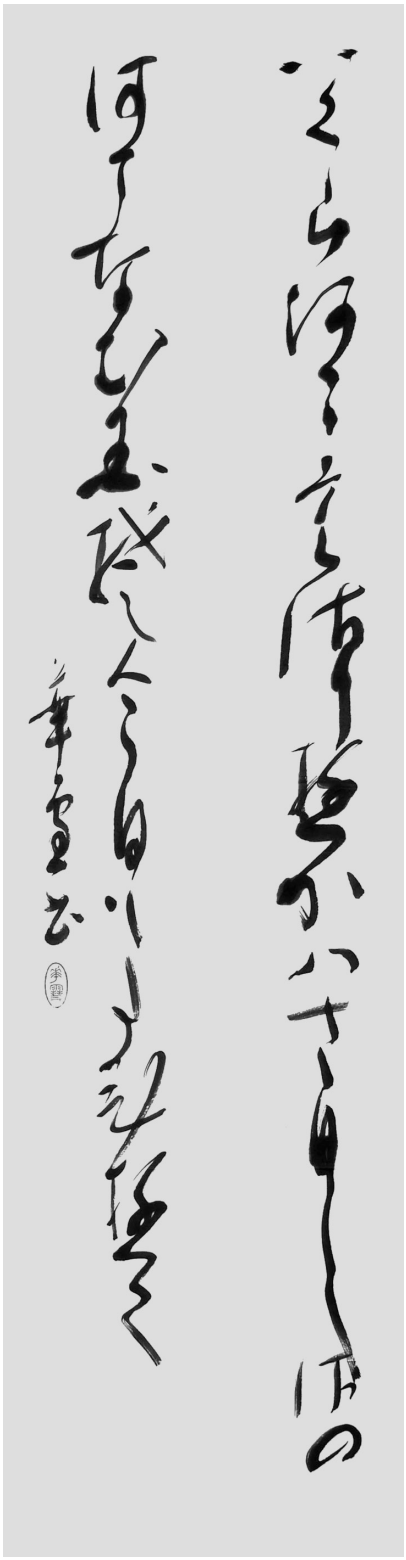
予告（四月二十二日締切）　**覺來眄庭前　一鳥花間鳴　借問此何時　春風語流鶯**（李白）

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（三月二十二日締切）

A

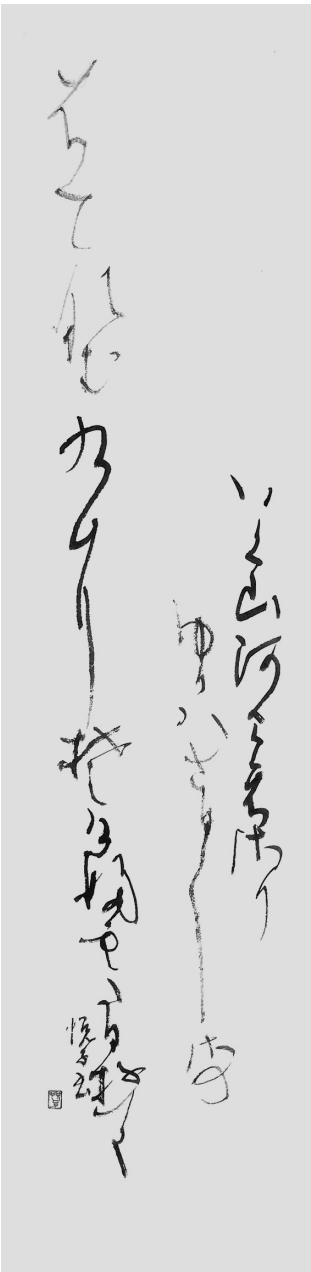
平岡華雪先生書



幾山河越えさりゆかば寂しさのはてなむ国ぞけふも旅ゆく（若山牧水）
い久山河こ衣佐り遊か八さ日し佐のはてなむ国楚今日も多飛遊久

B

長野悦子先生書



い久山河こえ佐りゆ可八さ日し佐の者て那む九耳楚介婦毛多日遊く

若山牧水の作風

十代後半から作歌を始めた牧水が自己の作風を確立するのは、大学四年の頃である。この年に、早くも代表作が生まれている。「別離」で歌壇に登場した牧水は、自己の内部の真実を鋭く歌う自然主義の歌人として認められた。旅の中で、多くの作が生まれている。

学び方

右上に大きく空間をとり重心を下方においた構図でまとめてみました。

書き出し「**い久山**」小さめに「**河こえ佐り**」　墨を出して連綿で少しつめて、二行目を渇筆で「**ゆ可八**」と続け「**さ日し佐の**」で引きのばし三行目「**者て那む**」まで渇筆で大きく動き「**九耳楚**」で墨を入れて「**介婦毛**」終盤「**多日遊く**」と文字を下方に集めて流れを振っておさめます。

予告（四月二十二日締切）　**花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる**（新古今和歌集）

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（三月二十二日締切）

星野春陽先生書

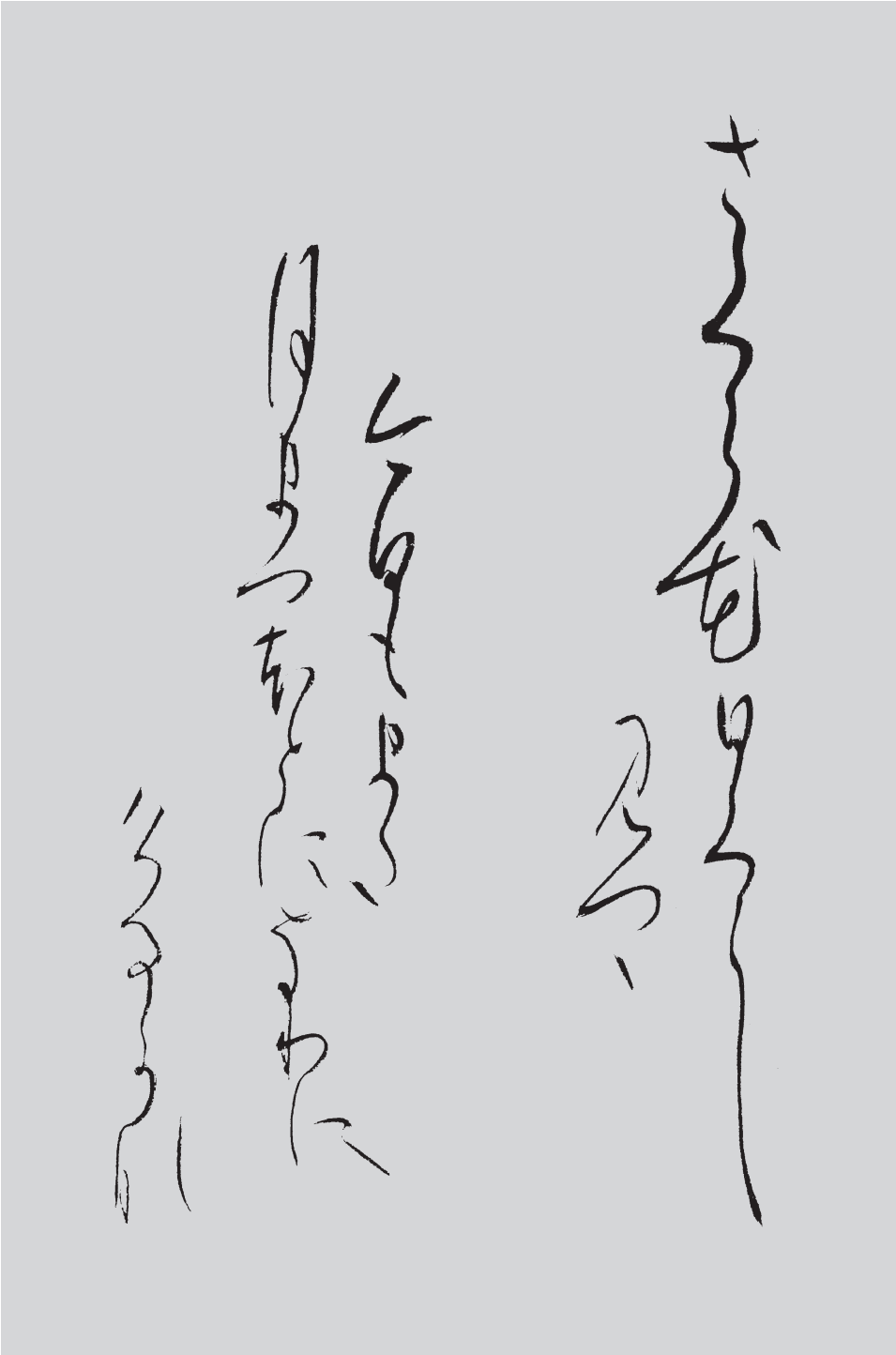
守默樂無荒（関涵）
默を守り　楽　荒む無し。

訳…言説せず或は幽静を守ってその楽しみを保っている。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　（三月二十二日締切）

高塚竹堂先生書



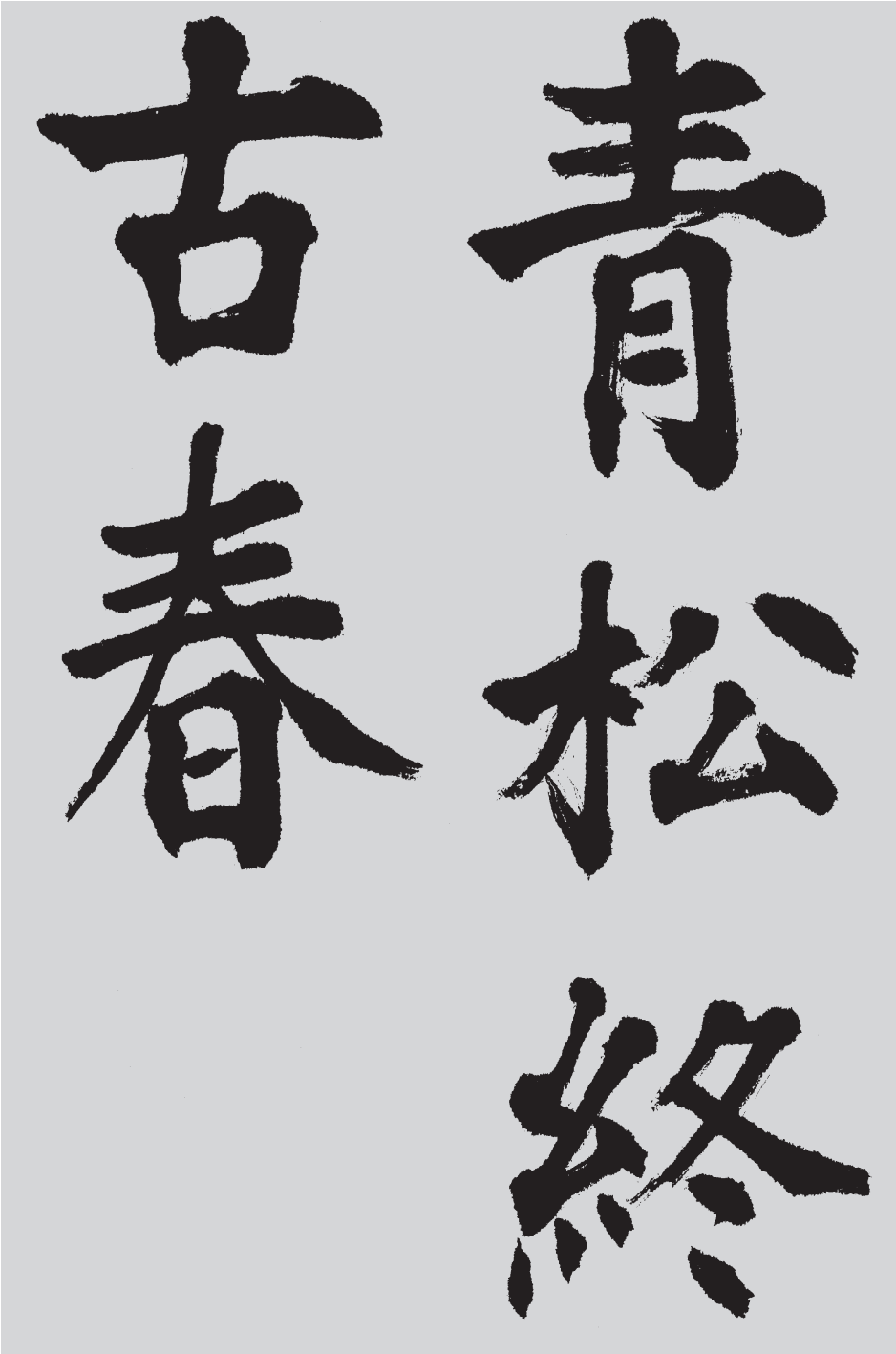
さくら花日ぐらし見つつ今日もまた月まつほどになりにけるかな（万代和歌集　橘為仲朝臣）

さ久ら花日くらし見つゝ今日も末多月末つ本とに奈利に介る可那

左余白に落款「〇〇書」と調和を工夫し書き入れる。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部漢字課題　（三月二十二日締切）



平岡華雪先生書

青松終古の春（呉爀）

訳…みさおを変えぬ青々たる松は永久の春を成している。

三横画が二ケ所。間隔は均等に。一画目は「仰」、二画目は「直」、三画目は「俯」。「松」と「終」の転折では、旁の一画目より二画目に移る時鋒先を左横に出し、鋒先を上に向けたまま突き筆の弾力を利用して横画を。「古」「春」では中心がずれないように注意したい。

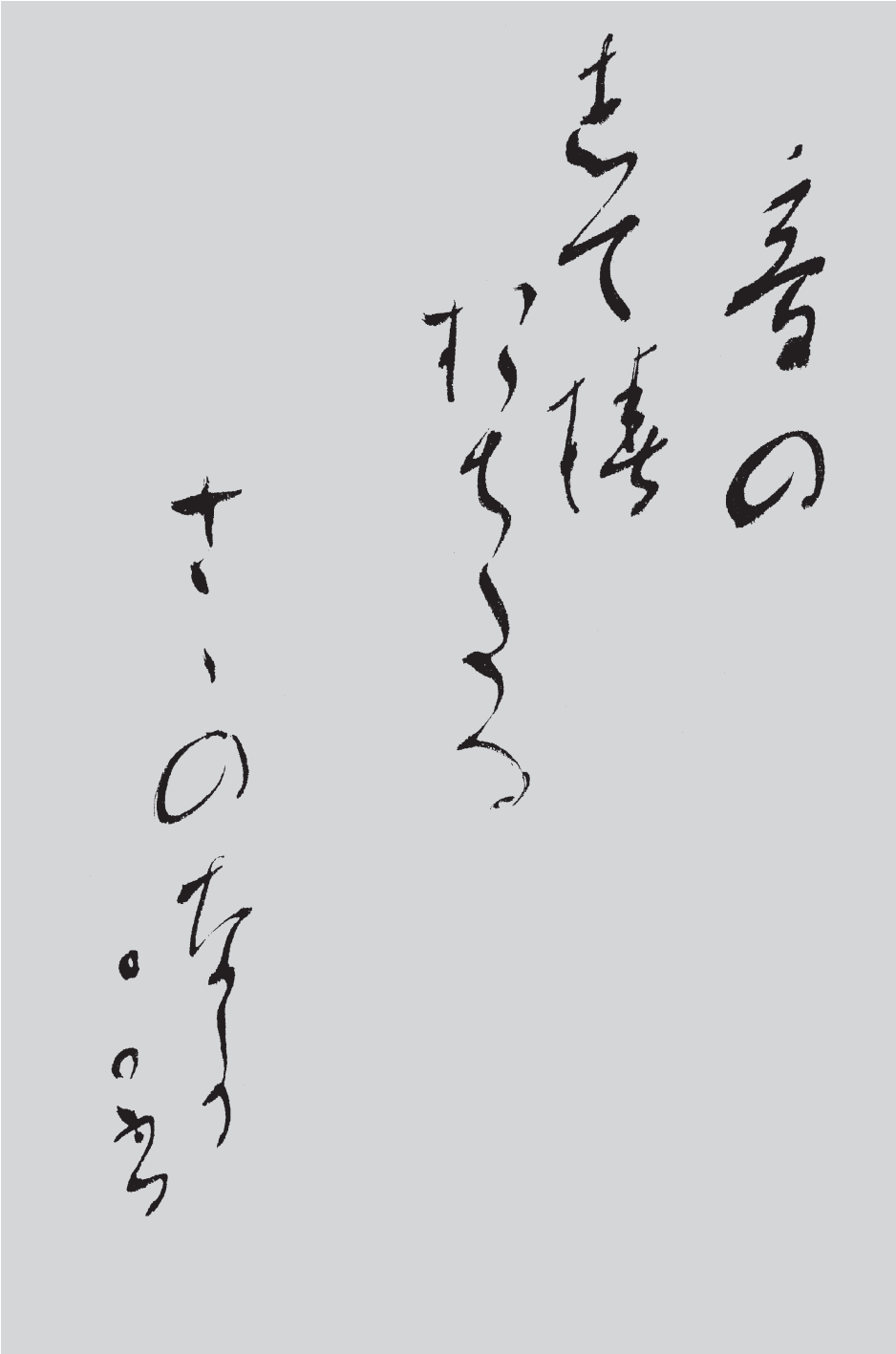
◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部かな課題　（三月二十二日締切）

平岡華雪先生書

音のして椿落ちたる笹の中（鬼史）

音の志（し）て椿於（お）ち多（た）るさゝのな可（か）



右群、左群（落款）の構成作。**「音の」**は分ち書き。次が三字で**「音」**と**「椿」**をずらして対比。二つの逆入筆に留意のこと。**「ち多る」**の三字連綿では左右のうねりと転折に習熟することが大切。**「さゝの」**、〝サァサァノ〟と口誦みながらリズムをとるとよい。

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇　試　随　意　参　考

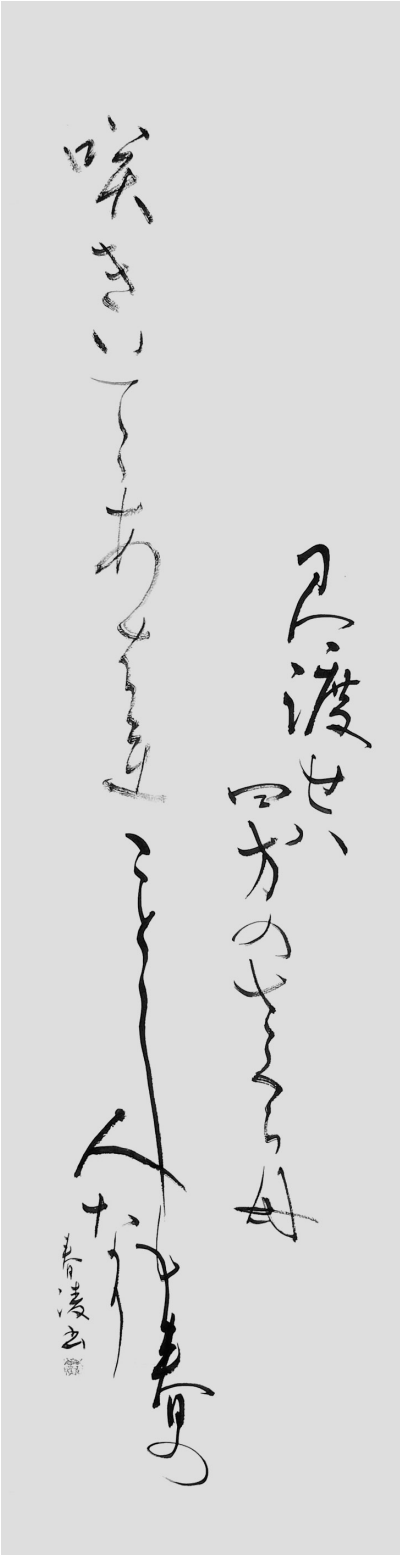
小暮菘華先生書

多情黄鳥短長曲　無數桃花濃淡粧（盧琦）

多情の黄鳥短長の曲、無数の桃花濃淡の粧。

訳…情の多い鶯は短長のふしで歌い、限りなき桃花はこくうすくよそおっている。

武井春凌先生書



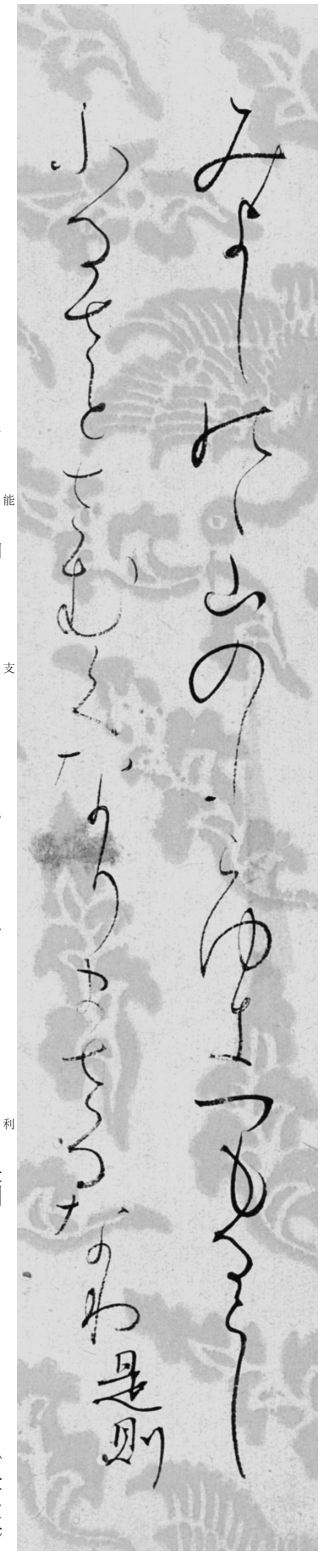
見渡せば四方のさくらも咲きいでてあはれ今年も春の人なり（清水比庵）

見渡せ八四方のさ久ら母咲きいで、あ者連ことしも春の人なり

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇　試　随　意　参　考

北島菁丘先生担当　粘葉本和漢朗詠集（上巻）　伝藤原行成筆



みよしの能ゝ山のしらゆきつもるらしふるさとさむくなりまさるなり利　是則

（二玄社）

「解説」

臨書はただ真似をするだけでは自己の書に進展は望めません。臨書から倣書へと進む事によって少しずつ創作の力がついてきます。

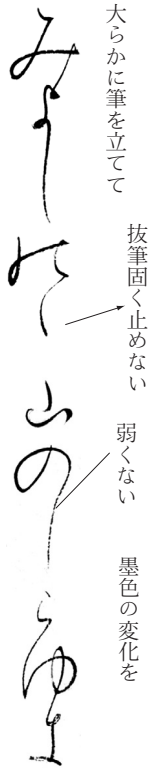
先ず自分が作品にしようとする歌を決め、古筆から集字をして貼り込み、最初は集字した文字を忠実に書き、変体仮名を加えたりして修正し、構成の散らし方は、寸松庵、継色紙等から取り入れて余白の活かし方を参考にして仕上げていくと自己の作品となって創作力がつくと思われます。

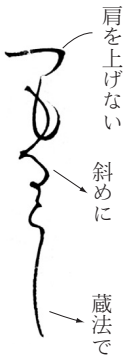
今回は用筆法を取り上げました。

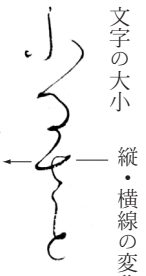
用筆法

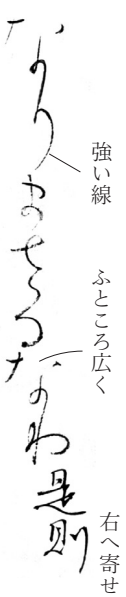
- 筆を立てる＝張りのある線
- 逆筆法＝抵抗感のある強い線
- 筆先を絞る＝弾力のある線
- 筆先を開く＝広がりのある面的な線
- 筆先を開いて縦に書く＝切り込む鋭い線
- 筆先に圧を加えて太く＝ふくらみの暖かい線

（学び方）





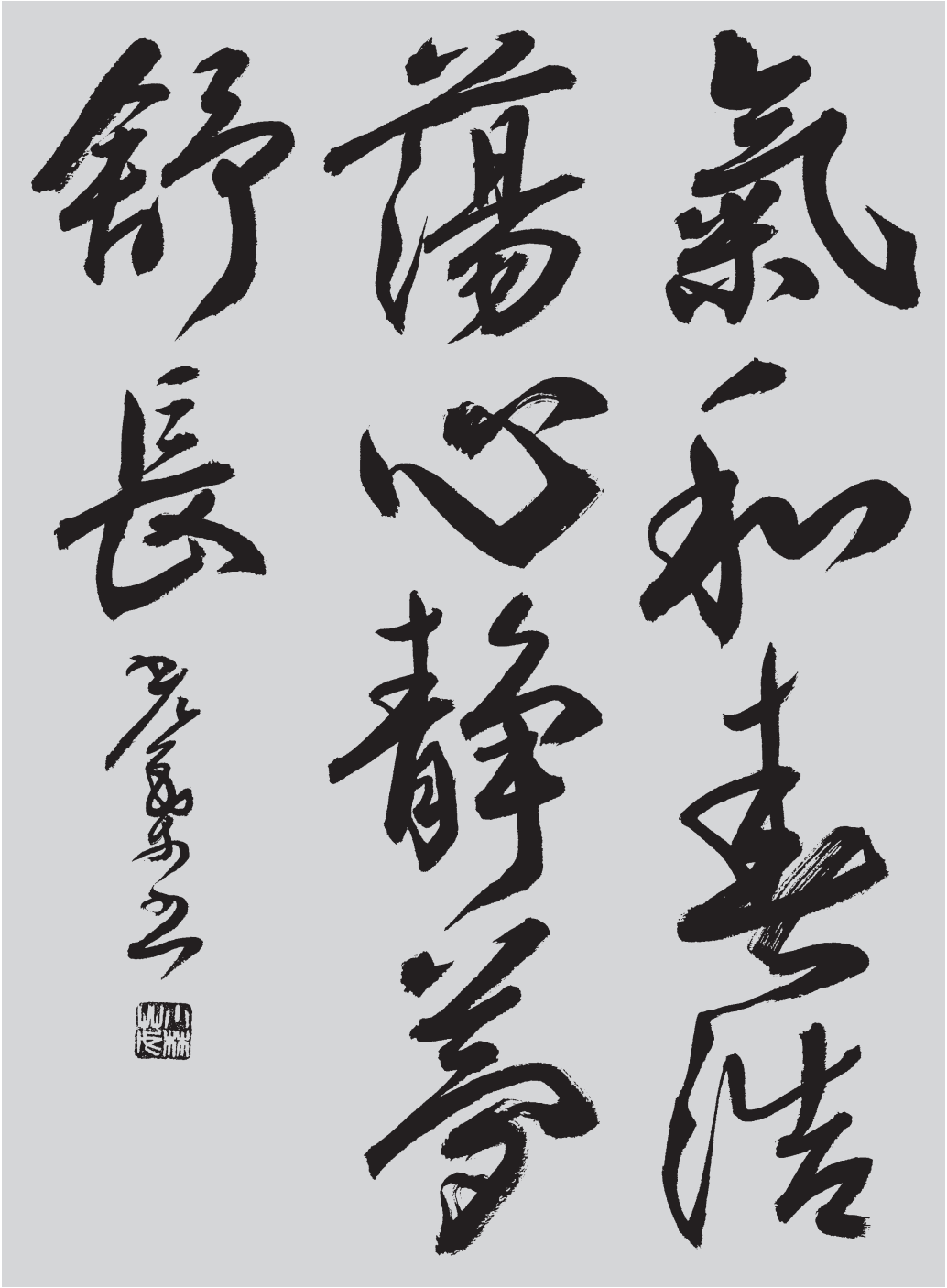




◆注　意　・条幅臨書部の出品はバーコード券右空欄に**条臨**と記入する。

昇　試　随　意　参　考

小林光葉先生書



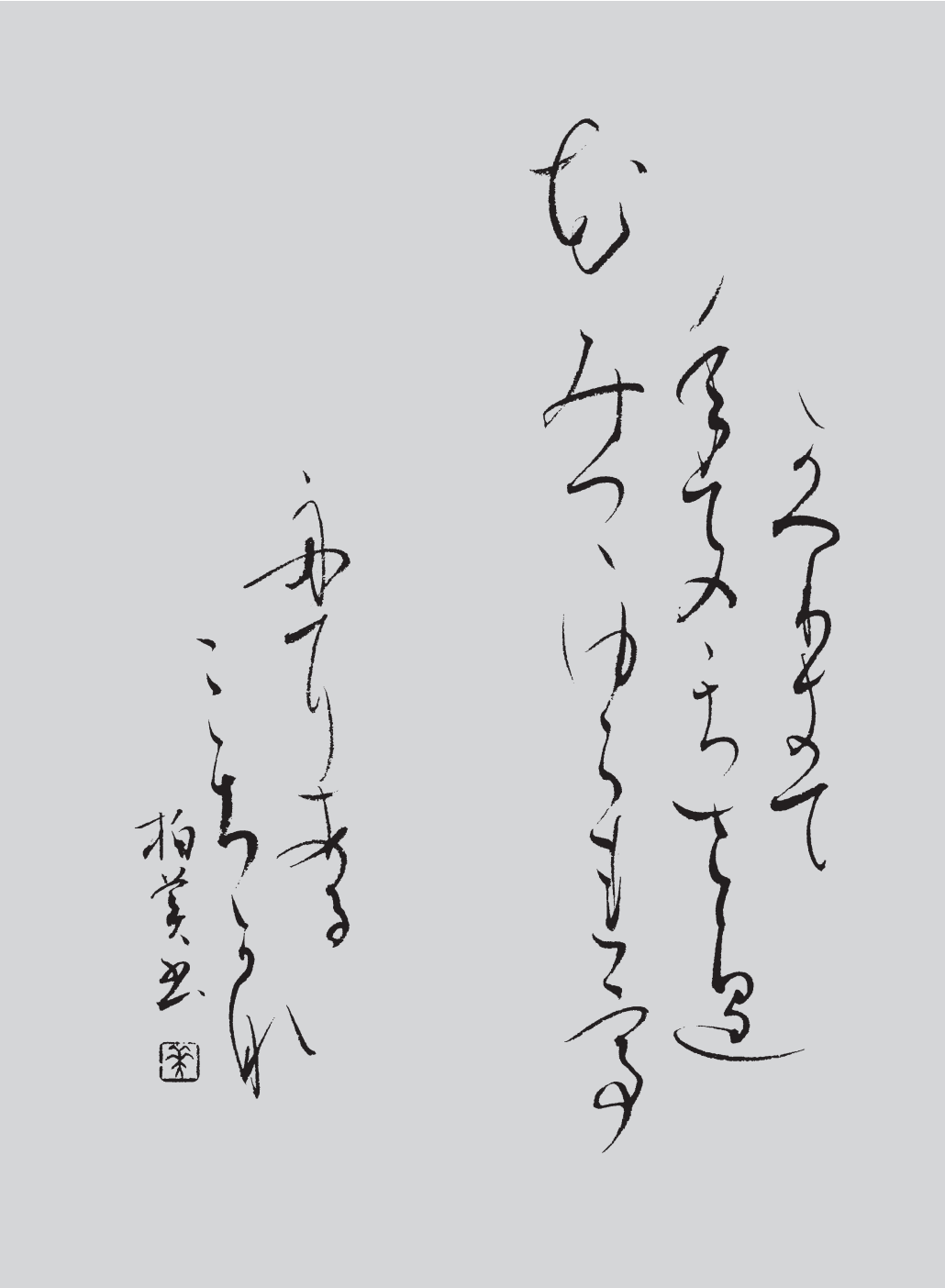
氣和春浩蕩　心靜夢舒長（周昂）
気は和ぎ春浩蕩。心は静に夢舒長。

訳…気和ぎて春はのびのびと、心はものしずかに夢がのどやかでことにさめにくい。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇　試　随　意　参　考

石島柏美先生書



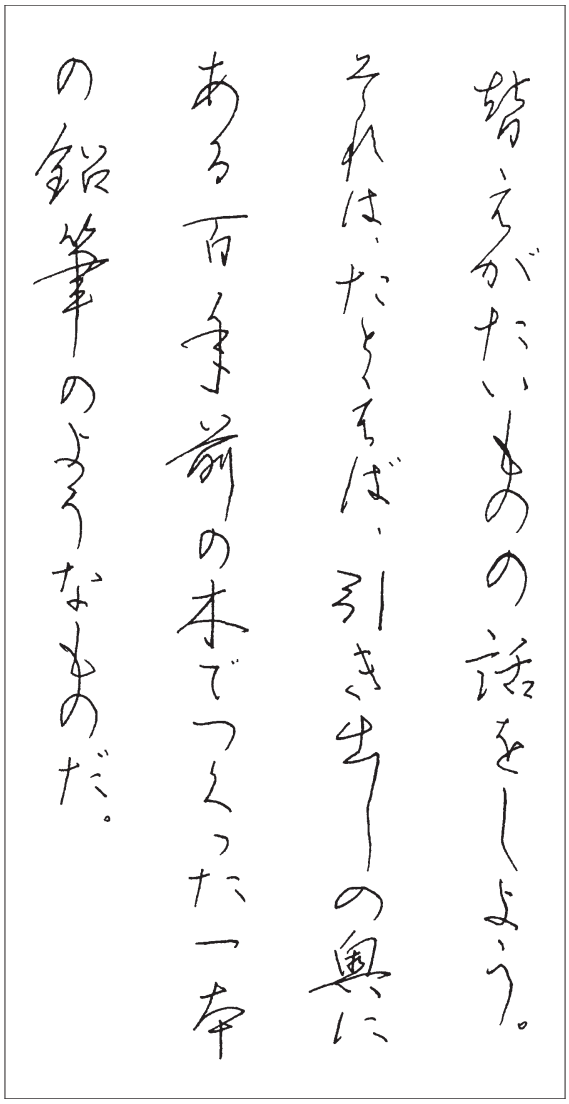
帰り来て寝ての後さへ花見つつゆられて舟にある心地かな（大隅言道）
可へ利支て年ての、ちさ邊花みつ、ゆら連亭舟耳あるこ、ち可那

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（三月二十二日締切）

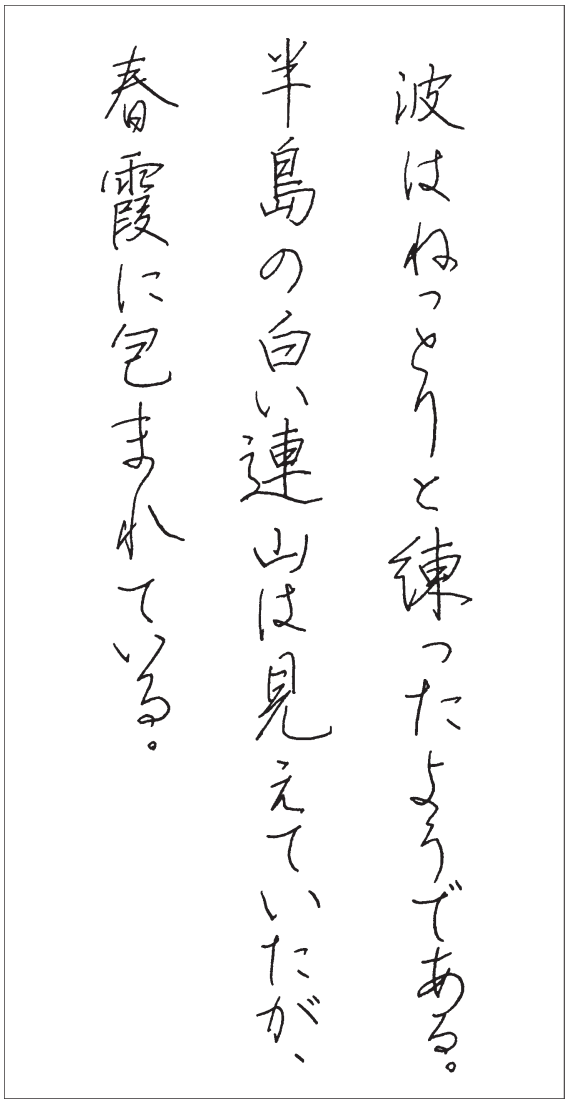
石原春香先生書

課題 1（初段以上）



松浦江波先生書

課題 2（初段格以下）



課題1（初段以上）

替えがたいものの話をしよう。
それは、たとえば、引き出しの奥にある百年前の木でつくった一本の鉛筆のようなものだ。
『世界はうつくしいと』より「大いなるものについて」の一節　長田弘

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。
(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。
(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）
(4) はじめて出品される方は私製の紙（3×4㎝位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新
(5) 会員は無料・会員外は四〇〇円
(6) 添削希望者は直接担当の先生にお申込下さい。（返信用封筒に自分の住所・氏名を記入し、切手を貼って同封のこと。）
課題1　六〇〇円
課題2　三〇〇円

課題1　石原春香先生　〒三七〇―〇〇八七
高崎市楽間町二二四ノ二一
課題2　松浦江波先生　〒二五二―〇二四三
相模原市緑区橋本六ノ四二ノ一九

課題2（初段格以下）

波はねっとりと練ったようである。
半島の白い連山は見えていたが、春霞に包まれている。
「月光のさざ波」立松和平